



第3回

「お産難民」をなくす

ためには、まず日本人の意識を変えないと。

子どもを産みたいのに、地元産婦人科医がいなくて、そんな事態が全国各地で起こっている。東日本大震災の際、日本産科婦人科学会理事長として、被災地の妊産婦支援に奔走された吉村泰典先生に、「お産難民」の背景を聞いた。

慶應義塾大学医学部
産婦人科教授

吉村泰典氏

聞き手
女優

紺野美沙子さん

紺野 東日本大震災のとき、吉村先生は産科婦人科学会の理事長をなさっておられたんですね。

ボランティアとして派遣したんです。

吉村 あの時は学会をあげて被災地の周産期医療をバックアップしました。石巻と宮古と気仙沼、この三つの地域に九カ月間、全国の大学から医師を二人ずつ

紺野 現在はどうか？
吉村 福島県は大変ですね。今でも福島県の四つの基幹病院に一カ月交代で人を派遣しています。福島では原発の問題が出てきて、働き盛りの中堅どころ、

全国の大学から医師を二人ずつ

きて、働き盛りの中堅どころ、



吉村泰典

Yasuomi Yoshizawa

慶應義塾大学医学部産婦人科教授。
昭和五十年慶應義塾大学医学部卒業。
米国ペンシルバニア病院・米国ジョンズ・
ホプキンス大学等を経て、平成七年より現職。
平成十九年から二十二年まで
日本産科婦人科学会理事長を務め、医療訴訟
問題や周産期医療環境向上活動に取り組み。

三十代、四十代前半の医師が福島を離れてしまったんです。地方の病院では、五百から六百のお産を二人から四人でやっていきますから、一人抜けるともう無理です。

紺野 この企画で最初にかかった二本松市でも、産婦人科のお医者さんがいなくて困っているとうかがいました。

吉村 二本松市も苦勞されていると思いますが、まだまだ厳しい状況のところがあります。たとえば北海道の根室市。ここは人口二万八千ですが、やはり産婦人科医がいなくて、中標津まで行かなければならない。そ

こまで五、六十キロあるんですよ。さらに、合併症があったりすると、百キロ近く離れた釧路まで行かないといけない。

紺野 百キロですか……。

吉村 北海道や東北には、そういう大変なところがたくさんあるんです。自分の町にお医者さんがいてほしいと言う気持ちはよくわかりますが、産科医が足りない現状からすると、これからは地域として考えていかなければいけない。たとえば福島だったら四つから五つぐらいの地域に分けて、総合周産期センター、地域周産期センターをつくって、そこに集約化していく

ということが大事ですね。

紺野 お医者さんが足りないというの、産科医を志す人が減っているということですか？

吉村 産婦人科というのはもと「きつい」「汚い」「危険」という三Kの職場なんです。外科系の当直は月三回ぐらいですが、産科の場合、若い人は最低でも月六回は当直をやっています。それも三十六時間ぐらい連続して働くんです。

紺野 それでもみなさん一生懸命やってこられたわけですね。

吉村 そうです。そこに、福島県立大野病院事件というのが起こったんです。産科医が通常の医療をしていたにもかかわらず、業務上過失致死の容疑で逮捕された。結局、無罪の判決が出ましたが、この事件がきっかけとなって、若手が産婦人科を敬遠するようになってしまったんです。**紺野** 仕事が大変なうえに、訴えられるリスクも高いと……。



吉村 産婦人科の訴訟というのは、外科の訴訟に比べると二倍ぐらいあるんです。妊娠や分娩に関して、国民の間に「安全神話」が染みついてしまったせいですね。日本の周産期医療は世界のトップクラスです。妊婦死亡率も世界で最も低い。そのため、何かトラブルが起こると、医療者側に問題があるのではないかと、そういう見方をされるようになってきてしまった。妊娠や分娩には、やはりリスクがあるんです。特に、最近晩婚化、晩産化が進んで、リスクの高い妊娠が増えてきています。これから、そういう啓発もしてい

なければなりません。

紺野 医師不足を解消する方法というのはないんでしょうか？

吉村 まずは労働環境の改善ですね。日本の主治医制度を止めて、アメリカのようにチーム診療にすべきだと思います。たとえば一人の妊婦さんに対して、四人、五人のチームで診る。そうすれば、そのなかの一人が診療しているときは、他のスタッフは休める。私が慶應で教えた産科の女性医師は八十数名いるんですが、いま常勤は四名しかないんですよ。あとはみんなパート医なんです。それはなぜかという、やはり結婚して子

どもが生まれると仕事を続けることができないうんです。

紺野 当直が基本になりますからね。小さいお子さんがいると難しいですね。

吉村 これは国家的な損失なんです。彼女たちがフルタイムで働いてくれたら、産科医不足も改善されるかもしれない。看護師さんを見ていると、彼女たちは出産後の復職率はすごく高いんです。これは三交替制というシステムがしつかりできてくるからなんです。時間が来たら次の人にバトンタッチができるようなシステムを考えていかなければ、女性医師は働くことがで



©Yamana Images

「未来を築いていくのは女性と子どもたちに他ならない」と吉村先生は言う。より良き未来のために周産期医療の充実が待たれる

きない。それはすべての職業に言えることじゃないでしょうか。女性が仕事をしながら子育てができる環境を真剣に考えないとけない。

紺野 おっしゃるとおりですね。

この企画では、リタイアされたお医者さまに、もう一度現場に戻っていただきたいという呼びかけをしているのですが、産科の場合はどうでしょう？

吉村 産科はハードですから、六十歳以上の方は体力的になかなか難しいと思います。ただ婦

人科健診とかであれば、引退された方でも十分貢献していただけるでしょうね。六十五ぐらいになって、もう一回仕事をしてみようかと思ったときに、そういった働き口があるということは大変いいことです。

紺野 年齢に応じた職場が用意されているということが大切なんです。

吉村 今度福島県いわき市の病院に行ってもらう産科の先生は五十ちよつと。福島県立医大卒です。彼は二年間現地で働くというんですよ。福島に恩返しをするんだと。

紺野 すばらしい！（拍手）

吉村 まだまだバリバリ働けますからね。あと十年たったら無理だろうから、今のうちに恩返しをしよう。

紺野 そういう先生が一人でも二人でも増えてくれればいいですね。今日はありがとうございます。



紺野美沙子

Misako Konno

昭和五十五年、NHK連続テレビ小説『虹を織る』でヒロインを演じる。その後、女優として活躍する。平成年には国連開発計画親善大使に任命され、国際協力の分野でも活動している。平成二十一年秋から、「紺野美沙子の朗読座」を主宰。